緋弾のアリア～無音の狙撃手～

ドリル男爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア～無音の狙撃手～

【Ｎコード】
Ｎ１６４８ＢＡ

【作者名】
ドリル男爵

【あらすじ】
東京武偵高校、武力を行使できる探偵である武偵を育成するその高校に転校してきた東郷忠一は、過去に引き起こした事件から銃の引き金を引けなくなっていた。
緊急時にも銃器を使わず、ただ傍観か近接戦闘での対応のみを決め込み、所属するアサルトの授業にも出席しない彼を、いつしか学校の人間はチキン（臆病者）と揶揄するようになっていた。

そんな言葉も全く気にすることなく、定位置である屋上でぼんやりと空を眺めていた時、彼は狙撃科に所属するSランク狙撃手レキと出会う。

その時、まだ彼は知らなかった。

このレキという名の少女が、ただ過ごすだけの毎日を変えるきっかけになる事を。

※注意※

・冒頭から残酷な描写が含まれます、苦手な方は見ない方がいいです。

・この小説は緋弾のアリアの二次創作で、戦闘描写の練習したいけどまた新しく設定考えて小説書くのが面倒くさい作者のわがままで生まれた小説です。

なので更新頻度はかなり遅いです。

序　『無音の狙撃手』

暗くぼんやりとした輪郭を持つ世界、背景の黒の上に緑や赤といった温度で色分けされた色彩が映し出されるそれが、サーモスコープから送りだされてくる標的の体温だと認識する頃には、照準線の中心に彼、もしくは彼女の頭部を捉えていた。

それから手にする特殊用途狙撃銃、それのスコープと一体化した視線を左右に移動させてみると、様々な武装が施された男たちの存在が明るみになった。

恐らくは中国かその辺からの輸入品であろうカラシニコフ小銃のデッドコピー版を基本とし、一世代前の主力車両ならば一撃で走行不能に陥れられるであろうＲＰＧ－７対戦車ロケット砲やＳＶ－９８狙撃銃を携える多国籍の人間およそ三十人で構成された彼らは、今まさに行軍を行おうとせんと隊列をなしていた。

その構造の簡素さと、部品と部品のクリアランス（隙間）を大きく取ることでどんな劣悪な環境でも故障しにくく、低い工業能力でも生産できるカラシニコフ小銃をはじめとする彼らの装備は、テロリストの兵器とあだ名される物ばかりで埋め尽くされていた。

そういった軍勢をサーモスコープでくまなく確認した一人の男は、手には旧ソ連軍が開発した特殊用途狙撃銃ヴィントレスの特異なフォルムを浮かび上がらせ、プローン（伏射）の姿勢をとって静かに息を殺していた。

ＡＫにＲＰＧ－７を装備した強武装の軍勢か、少なくとも装備だけは骨のある奴ばかりが揃っているな。

整列する小隊を目の前にして、狙撃姿勢を保ったままで舌舐めずりした男は、首に巻きつけられた骨伝導マイクに声を吹きこむ為に、数時間は震わせていない声帯に力を込める。

（識別番号０１、目標の小隊を発見。武装はＡＫにＲＰＧ－７にＳＶ－９８狙撃銃。指示を待つ）

何時間もの間、極寒の中に身を置きながら無言で狙撃姿勢をとっていた事と、およそ四百メートル先に作戦会議で説明された狙撃目標の小隊がいる事、その二つの要因が相まって、骨伝導マイクに吹きこまれた声は思った以上に低くしわがれた物になっていた。

だが、そんなしわがれた声でも、彼と同じく骨伝導マイクを首に巻き、然るべき武装を整えて周辺に展開しているであろう仲間達には十分だったらしい。

（指揮官より識別番号０１へ、目標の小隊をこちらでも確認。既に周囲への特殊部隊の配置は終了した。後はいつも通りの手法で特殊部隊の突入を開始する）

その名の通り空気ではなく人体内部の骨を振動させることで音を聴覚に伝える骨伝導マイクは、周囲に音を全く漏らさずプローンでの照準を続ける男に仲間達の意図を伝えてきた。

体内の骨を密かに振動させたその声を聞いた男は、先程よりも一層

集中して一番初めにサーモスコープ越しに視認した大男に再び照準を合わせた。

小隊の先頭に立ち、構成員達に何か語りかけているといった様子の大男は、小隊の指揮官であり、今は演説か何かで部隊の士気を高めている最中だろう。

カラシニコフライフルに長射程の狙撃銃、終いには対戦車ロケット砲で武装した小隊。

彼らがどれだけの訓練を受けているかどうかは推測するしかなかったが、少なくとも武装は通常の軍隊と大差ない装備だ。

戦闘訓練が付け焼刃程度だったとしても、彼らが“目標施設”への侵攻を果たすことができれば、近隣住民はおろか、この極寒の大地に位置する国家の根幹をも揺るがす事態へと発展する。

現在、小隊が保有している山中のアジト、そこからしばらく進んだ場所に位置する軍事格納庫、そこにある物の名称も危険性も十二分に理解していた男は、目が痛くなるようなサーモスコープの照準線の中心から少し下に、防寒着に包まれていないせいか、他の部位よりも低い温度で表示されている頭部を持ってくる。

自分の報告に応答してきた指揮官、たぶん“大佐”が伝えてきたいつも通りの手法。

自分の初弾での狙撃成功を合図に特殊部隊を突入させる手法。

それを脳裏に描いた男はＶＳＳ狙撃銃のトリガーを遊びが無くなるまで引く。

照準した大男が演説の最後に手にしたカラシニコフライフルを掲げた瞬間、手ブレを抑える為に息を止めていた男は、遊びが完全に消えていたＶＳＳの引き金を一息に絞った。

今まで眠っていた撃針が９×３９ｍｍ弾の雷管を叩き、叩かれた雷管が銃弾内の発射薬を燃焼させ高圧ガスを発生させると、その凄まじい圧力にさらされた大口径の弾頭は銃身内を音速に近い速度で突き進む。

序　『無音の狙撃手』

銃身内蔵式の高性能なサプレッサー（減音器）が発射の際に発生した燃焼ガスを細かな穴から徐々に拡散することで銃器特有の甲高い破裂音が消された事と、ＶＳＳ専用に開発された９×３９ｍｍ弾の銃口初速が音速を超えず衝撃波を発生させない事、二つの要因が重なって銃口を出たＳＰ－６、すなわち９×３９ｍｍ徹甲弾の弾頭は、僅かなボルトの作動音と排莢音を残しマズルフラッシュを出すこと無く外気へと躍り出た。

その後も二回ボルトの作動音が響き渡り、三点バーストで射撃された三発の大口径弾は、空を切り裂き、黒々とした夜の帳を猛然と飛翔する。

男から照準された大男までの距離はおよそ四百メートル、通常のボルトアクション狙撃銃ならば射手が十分な訓練を受けていれば命中が期待できる距離だ。

だが、男の持つＶＳＳ狙撃銃は他のボルトアクション狙撃銃と違い近，中距離での戦闘に威力を発揮する銃であり、四百メートルの距離では命中させるには精度的に少々問題が出てくる距離だった。

それにＶＳＳ狙撃銃に使用されている専用弾薬９×３９ｍｍ弾は、その弾頭の重さから、軌跡が軽く放物線を描く傾向があり、これは照準の難易度を上げる助けとなっている。

三点バーストで射撃された事もあり、射出された三発のうちどれかが命中すれば幸運、一般的な射手ならばそう考えるに違いないし、そもそも、よほど隠密に動かなければいけない時以外、ＶＳＳなん

て持ち出そうとはしないだろう。

しかし、冷たい地面に身を置いているこの男はそういった一般的な射手とは違う。

四百メートル先の目標を狂いなく打ち抜ける射手はざらにはいるが、四百メートル先の三十センチの円の中に連続して着弾させる事が可能な射手はそういない。

ＶＳＳ狙撃銃の引き金を絞った彼は、後者に該当する射手だった。

軽い放物線を描いて瞬く間に狙撃対象の大男との距離を詰めた銃弾の束は、全くぶれること無く彼の首と頬とこめかみに殺到した。

弾頭の重量からボディーアーマーやケプラー繊維すら貫く事ができる程のその銃弾は、途方もないその運動エネルギーを捌け口を大男に定め、非防弾対象である肉体を貫き、体内へと進行する。

ライフルリングにより螺旋回転がかけられたそれは、筋組織をむちゃくちゃに引き裂き、復元不能なほどの銃創を生み出す。

それだけでは銃弾のエネルギーを完全に消費することが出来なかったらしく、更にその身を突き進めた銃弾は頚椎、頬骨、頭蓋骨が砕けるくぐもった音を小隊が集まるアジトの更地に体現させた。

首の神経をずたずたに引き裂き、脳細胞の内部を突き進む三発の弾頭は、この時点で大男の生命活動を停止させるには十分な働きを見せていた。

しかしながら、それだけではまだ貫通力の高い９×３９ｍｍ弾の勢

いは消えず、反対側の皮膚を破いて虚空に飛び出した銃弾は、脳漿と血液の混じったどす黒い液体と共に、再び虚空へと飛び出していった。

突如として飛来した三発の銃弾、それにより右側頭部と首の後方の大部分を失った大男は、生命を失うと共に身体の統制を失い、糸の切れた操り人形のように仰向けに倒れ込んだ。

（突入！！、残党狩りだ！！）

それと同時になだれ込んだ特殊部隊、数十名の精鋭集団の持つＡＫ－７４アサルトライフルの連射とＡＮ－９４アバカンの高速二点バーストによる射撃が、頭を失った小隊の全面に展開される。

それをサーモスコープで確認した男は、その場に静かに立ちあがると、急に鬱蒼と茂る密林の中を腰を低くして走り始めた。

圧倒的な遠距離から狙撃できるボルトアクション狙撃銃なら、相手の狙撃手と周囲さえ警戒していればその場にとどまって狙撃することができる。

何故なら、焦る相手が引き金を絞るアサルトライフルやサブマシンガンでは精度や射程の問題から、遠距離に陣取る狙撃手には命中が望めないからだ。

だが、男のＶＳＳ狙撃銃でまともに狙える距離は、たかだか三百から四百メートルが限界だ。

もし、相手が彼を発見してしまえば、即座に音速を超えるカラシニコフライフルの銃弾とＲＰＧ－７のロケット弾が殺到する事だろう。

それを防ぐための防護策が、一人狙撃したら即座に場所を変え、別の地点から狙撃を行う方法だ。

事前に周囲の地形を把握しておく必要性はあるが、この方法をとれば射程が短いＶＳＳでも反撃を受ける可能性を減らす事ができ、射撃音が少なくマズルフラッシュが発生しないＶＳＳでの隠密性を大きく高めることができる。

序　『無音の狙撃手』

二年前に入隊したこの部隊で初めて握ったＶＳＳ狙撃銃、その日から今日まで多くの人間と戦い、殺害してきた上での最高の運用法が、狙撃地点を即座に変えるゲリラ戦法だった。

連続した銃声が響き渡る中、針葉樹林が連続して生える林、それに守られた高台を第二の狙撃地点に選んだ彼は、相手の狙撃手からは死角となる木々の陰で一度息を整える。

それからスコープを覗き、今度はスタンディング（立射）の体制で浮足立つ小隊の兵士に照準を合わせた彼は再び大口径弾を三点バーストで二回撃ち放った。

寸分の狂いなく一瞬で目的地点に到達した大口径弾は、敵の小隊の中でも男に対する最も大きな脅威となっているＳＶ－９８狙撃銃を持った二人の兵士の頭蓋を打ち砕く。

指揮官を失うと同時に奇襲をかけられた事で完璧に浮足立った敵部隊、彼らは果敢に反撃する暇も無く、なだれ込んだ特殊部隊の弾幕と、闇に溶け込んだ特殊用途狙撃銃により、一人、また一人とその人数を減らしてゆく。

もう残り一発しか装填されていない弾倉を躊躇いも無く外し、ケブラー製防弾チョッキの胸ポケットから新たな弾倉をＶＳＳに装填した男は、物影に身を潜めながらコッキングレバーを引く。

初弾を装填したＶＳＳを再び正面で構えた男は、ひとまずは攻撃を受けている敵部隊の状況を把握する為に、物陰からサーモスコープ

に目を通した。

先程の狙撃により、ボルトアクション狙撃銃を携えたスナイパーの生体反応は消えていた。

残る敵はオートマチックのカラシニコフライフルとＲＰＧ－７を携行した歩兵のみだが、これは味方部隊の奇襲攻撃によりその大半が胸や頭から熱い血液を噴出させ、戦闘能力と生命の両方を奪われ無力化されていた。

指揮官を狙撃され、突発的な特殊部隊の攻撃に反応できず、ただ茫然と立ち尽くした所で頭部に銃弾を受けて倒れる者。

恐怖に心を支配され、手にした自動小銃を無茶苦茶に乱射し、結果的に味方の四股を撃ち抜いてしまった者。

ものの数分で殆ど制圧されてしまった小隊、彼らの死にざまを無言で脳裏に思い浮かべた男は、せめて早く楽にしてやろうと、残る敵兵士へと照準を合わせようとする。

その過程で、彼は視野の右端、恐らくは敵小隊の武器庫の役割を成しているコンクリート製の倉庫に異変を感じ、照準線の中心をその建物の入口に移動させる。

スコープと一体化した視線が見た物、研ぎ澄まされた狙撃手の神経が危険信号を送っていたそれは、倉庫の戸口に立つ一人の敵兵士の姿だった。

その兵士の負傷の有無や、どんな表情を浮かべているかは体温を感知して視覚化するサーモスコープの映像では見ることは出来なかっ

たが、恐らくは身体を味方、又は自分の血で濡らし、激昂と恐怖が入り混じった表情で立ち尽くしていた事だろう。

無機質な温度表示に変換された兵士が構えるＲＰＧ－７対戦車ロケット砲、それの照準は明らかにアジトの正面玄関の手前からスリーマンセルで進行する特殊部隊要員へと向けられていた。

まずいと考える暇も無く、殆ど反射的に動かされた腕が、ＶＳＳの銃口をＲＰＧを構える兵士の頭部へと持っていったが、即時撃発可能なそれが三点バーストの銃弾を射出する事は無かった。

何故なら、倉庫の戸口から少し右にずれた敵兵士、まるで誇示するかのように移動した彼の後方に、壁かドラム缶か何かに背を預ける一人の人間の姿が視認出来たからだ。

敵の小隊の構成員とは違い、ケブラー製防弾チョッキや編み上げのブーツなどの徹底した戦闘用装備に身を包み、負傷しているのかその場から動かず大きく肩で息をする人間、今強襲をかけている部隊の象徴であるチタン製のフルフェイスヘルメットを装着する彼が味方だということを判断するには一瞬の思考で済んだ。

倉庫の奥でぐったりと座り込む味方の存在、それをあからさまに見せつけたＲＰＧ持ちの敵兵士は、正面のスリーマンセルに警戒しながら元の位置へと戻っていた。

元の位置に戻った敵兵士は、正面のスリーマンセルに細身な対戦車ロケットの弾頭を向け、今にも引き金を引こうと待ち構えているが、既に狙撃体制に入っている男は彼を狙撃するのに戸惑いを感じていた。

銃器に金をかけすぎたせいか、敵の防弾装備は紙に等しいほど乏しい物だった。

序　『無音の狙撃手』

非防弾対象と言ってもいいほどの敵兵士をＶＳＳ狙撃銃、それも貫通力の高いＳＰ－６徹甲弾が装填されているそれで射撃を行えば、敵兵士を貫通した銃弾はそのまま背中を抜け、後方で半ば人質として座り込んでいる味方に殺到するだろう。

敵兵士と違い徹底した防弾装備を施されているものの、露出した顔や腹部に貫通した銃弾を受ければ間違いなく死に直結する致命傷となる。

ＲＰＧの標的となっているスリーマンセルが一向に射撃を開始しないのもそういった理由があったからだ。

今からまだ貫通力の低いフルメタルジャケット弾を装填し直すか？

いや、いつＲＰＧによる射撃を行うかわからない敵兵士を目前にして一瞬たりとも目を離すことは出来ない。

戦闘中は一切シャットアウトしていた良心がそう理性に提案してきたが、男の冷たい理性はそういった提案をすぐさまはねのける。

これで男に残った選択肢は味方に構わず敵兵を狙撃するか、そのままスリーマンセルにＲＰＧの弾頭が突っ込むのを傍観するか、その二択に限られた。

三人の味方が死ぬか、一人の味方が死ぬか。

損得感情で動く戦闘時の男は、既に二択の内の一択を選んでいた。

ＲＰＧを持った敵兵士を狙撃し、この奇襲作戦を終わらせる。

そう決意した彼は、照準線を敵兵士の首元に合わせると、ＶＳＳのトリガーを遊びが無くなるまで引き絞る。

貫通力の高い９×３９ｍｍ弾、それで狙撃すれば後方の味方に貫通した銃弾が当たるかもしれない。

そんな中で、戦闘中は心の奥底に閉じ込めていた筈の良心が、合理的で怜悧な理性の制止を振り切り、そう紛糾した。

完全な防弾装備を着込んだ特殊部隊要員だ、当たり所が悪くない限り負傷する事は無いし、その可能性も極端に低い。

心中の奥底から湧きだした紛糾、それは射撃の一歩手前まで来ていた男の手を止めさせる。

今からフルメタルジャケット弾に換装すれば、何とか貫通を防げるかもしれない。

そうして装填し直している間に敵兵がＲＰＧを発射すれば、スリーマンセルの三人の命は保証できない。

人質に取られた仲間、例え一人だったとしてもそれを見捨てるのか？

一人を助けて三人を殺すよりも、一人を殺して三人を助けた方がいい。

――それに、どの道ＲＰＧが発射されれば発生した高熱のバックブラスト（後方噴射）で、人質の味方兵士は全身を焼かれながら死に絶えるだろう。

自問自答のように問答を続ける理性と良心、その両者は互いに譲り合うこと無く意見の飛ばし合いを行っていたが、理性の放った最後の一言が男に最終的な決断をさせた。

目の前の絶望について考えるよりも、希望的観測に賭けろ。

過去、“大佐”が入隊して間もない自分にかけた言葉を思い出した男は、今度こそ遊びが無くなるまで引いたトリガーを、息を止めながら一息に絞っていた。

射撃前にＶＳＳのセレクターをフルオートからセミオートに変更し、単発による精密射撃を行ったのが、男の良心が成した最低限の働きだった。

静かで音の出ない兵器、ヴィントレス狙撃銃から滑り出た一発の徹

甲弾、それは人の目には絶対に視認することの出来ない速度を保ち、一瞬でアイアンサイトを覗く敵兵士の目前まで迫ると、あらかじめ照準された首へと全くぶれること無く吸い込まれていった。

表皮を突き破り、肉を抉った高速の飛翔体はそのまま敵兵の喉仏を粉砕すると、少し勢力を落としながらも背骨の要所と脊髄を破壊するくぐもった音を体現させていた。

殺ったか？

スタンディングの狙撃姿勢のまま、熱い血飛沫がオレンジ色の色覚となって噴き出すサーモスコープを覗きこんでいると、ＲＰＧの弾頭と本体の重みに引かれた敵兵士が、前のめりになって倒れてゆく光景が浮かび上がって来た。

その場に肉を打ちつける重い音を発生させたであろう敵兵士、喉元を完全に粉砕された彼は手にしたＲＰＧの引き金を引くこと無く、傾斜のついた地面を静かに転げ落ちていった。

（敵が無力化された、恐らく識別番号０１の狙撃だ！！）

ＲＰＧに狙われ、凍りついていたスリーマンセル、骨伝導マイクから伝わる彼らの興奮した声が、男へ一瞬の安堵を訪れさせた。

しかし、そんな一瞬の安堵も、後方の人質の存在を思い出せばすぐさま消え失せてしまった。

狙撃の後、ＲＰＧの暴発を心配して敵兵士に合わせられていた照準線、それを恐る恐る倉庫の戸口に向けてみる。

序　『無音の狙撃手』

絶命した敵兵士の血液まみれになった地面、そこからゆっくりと視線を上げていくと、先程と同じような体温表示を見せる味方兵士の四股を見ることができた。

ただ、先程と違う点があるとすれば肩で息をしていた味方兵士、常に上下していた彼の腕が今はだらりと投げ出されている所だ。

――嘘だろ……。

そう心中で呟いた後にスコープを更に上に上げると、額を銃弾に撃ちぬかれ、ぽっかりと空いた大穴からだらだらと血液と脳漿が混じった液を流す死体、否、かつて味方兵士だった肉塊が視界に飛び込んできた。

（コンタクトを殺害、我が方にも被害が出た。ひとまず全部隊は敵性コンタクトに警戒しながらアジト前へ直ちに集結せよ）

骨伝導マイクから聞こえてくる味方部隊の誰かの低い声、彼の話の中に含まれる“我が方の被害”というのが、額の大半を失いながらどんどんその温度を下げている味方兵士だということはすぐに理解できた。

何故なら、彼の生命活動を完全停止まで停止させた凶弾、それを放

った射手は他でもないＶＳＳのスコープを覗きながら放心する自分だったからだ。

例え三人の特殊部隊要員を救う為であっても、助けを求める一人の味方兵士を殺害したその事実は一切変わることは無い。

部隊全体からしてみれば、ＲＰＧ持ちの敵兵と一緒に撃ち抜かれた味方兵士は戦力の低下に繋がる尊い犠牲だろうが、死んだ味方兵士からしてみれば失われた命は人生を構成する全てだ。

これが現実なのか？　敵兵士の喉元を打ち砕いた銃弾が、味方兵士を殺す元凶になってしまったのか？　戦闘の興奮がどんどん冷めゆく最中で、事態の急転についていけない頭がそう並びたてたが、零下に近い気温にさらされ、青い温度表示を見せる死体の姿を見ればこれが間違いなく現実であることを教えていた。

セーフティーにかけた指先まで恐怖が逆り、俺が殺したんだ……、とぼんやりした意識の中で考えた男は、遠のきかけた意識に一つの顔が像を結ぶのを見た。

自らの全てを奪った男に怒るわけでもなく、ただじっと男を静観するその顔は、血の気の失せた青白い部分と、砕けた額とかき回された脳漿が構成する赤黒い部分を見せる死んだ味方兵士の顔だった。

自分より何年も前に部隊に入り、様々な戦場に身を投じてきた味方兵士、それを見た瞬間、得体の知れない感情が心の奥底から噴き出したのがわかった。

お前のせいだ……、お前が撃たなければ俺は生き長らえることがで

きたのに。

砕けた額のせいで眼球がこぼれ出た能面の低い声、耳にまとわりつくその声に迷彩服で包んだ身から夥しい量の汗が流れ出る。

前方のスリーマンセルを救うためにはこの手しか無かったんだ……、これが今できる最善の手段だったんだ！

自分を責め立てる死人の声、それを半ば自己を正当化するように撥ね退けようとした男だったが、鮮烈な能面を見せる死体の言葉は止まなかった。

お前のせいだ……。

お前のせいだ！！

俺が死んだのはお前のせいだ！！

「あああああああああああああああああっ！！」

まるで豪雨のように降り注ぐ幻聴、侮蔑と恨みで満ちたデスマスクが発音する言葉を一字一句逃さず取り込んだ男は、気づけばそうやって奇声を上げながら手にしたＶＳＳを左手に持ち替えていた。

（指揮官より識別番号０１へ、何があった！！）

骨伝導マイクより聞きなれた“大佐”の声が伝わる中、セレクターを単発射撃設定したＶＳＳの引き金に指をかけた男は、その銃口を右手の手の平に密着させるとすぐさま引き金を絞っていた。

静かな射撃音と共に射出された大口径弾、本来なら敵に向かって飛翔する筈のそれは今回ばかりは射手である男の右手に向かい、短い銃身の中を音速に近い速度で進む。

ほんのわずかな距離を凄まじい速度にて一瞬で進んだ銃弾は、絶対に外す事の無い的、密着した右手の手の平に激痛と共に突き刺さっていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1648ba/

緋弾のアリア～無音の狙撃手～

2012年1月10日12時45分発行